

遊休地を活用し経営規模拡大を目指す都市近郊肉用牛経営

～「頭と体を使うと肉用牛経営は儲かる」を夢に～



長友 明 (ながとも・あきら)

長友 真理子 (ながとも・まりこ)

宮崎県宮崎市

<推薦理由>

平成12年3月、宮崎県で口蹄疫が発生、翌年9月のBSE発生とそれに続いた食肉偽装問題等で牛肉の消費減退が起こり、子牛・牛肉価格は大幅に低下、肉用牛経営は深刻な影響を受けた。

その後の信頼回復に向けた懸命の努力によって、14年後半には価格が回復、現在まで堅調に推移している。そうした状況の下、本県の肉用牛飼養戸数は12,500戸とこの10年で43%減少したが、飼養頭数は256千頭とやや増加、平均飼養頭数は20.5頭に拡大した。

肉用牛経営者の高齢化が一段と進み、産地維持のためには、とくに、繁殖経営の規模拡大、大規模経営の育成が最大の課題となっている。

その様な中で、当経営主は県立農大卒業直後の就農以来、22年間をかけて、自家生産牛を中心として着実に規模拡大を重ね、繁殖牛100頭規模の大型経営を確立している。規模の大きさに関わらず、良好な繁殖成績にみられるように生産技術のレベルも高く、収益性の高い、安定経営を作り上げている。当経営は、肉用牛産地として最大の課題である。「繁殖経営の規模拡大」における最も優れたモデルといえる。

審査においては、以下の諸点が高く評価された。

- ① 経営主は、就農以来、極めて堅実な経営方針を貫き、22年という長い期間をかけて、借入金に頼らず、能力の判明した自家生産牛を中心に着実な規模拡大を続け、100頭規模の大型繁殖専業経営を築き上げた。
- ② 大型経営にありがちな「量で勝負」といった方針をとらず、平均分娩間隔12.4ヵ月と県平均を大幅に上回るなど生産技術のレベルが高い。また、優良繁殖牛

群の整備に力を入れた結果、子牛販売価格は地域の家畜市場平均比109%と、市場評価の高い優秀な子牛を出荷している。

- ③ 地域が施設園芸地帯であり、土地利用型農業が少なく農地にゆとりがあること、都市近郊とはいっても高齢農家が多く、遊林農地が多く発生していることから、有利な条件で借地を確保し、粗飼料の自給体制を確立している。この結果、規模が大きく、一部肥育もとり入れた経営でありながら、TDN自給率42%、周辺から調達する稲わらを入れると51.5%という高い自給率を達成している。

また、地域が海岸に近く、砂質土壌で適する夏型粗飼料がないことから、自生するメヒシバを利用した良質・低コストの粗飼料の確保を図っている。

- ④ 地域内にはシーガイアなど大型観光・リゾート施設が多く、環境整備には相当の配慮が必要とされるが、ノコクズと近辺で入手できる廃菌床を敷料として用い、臭気の発生を抑えるとともに、短期間での完熟堆肥化が図られている。
- ⑤ 平成14年度の経営実績は、肥育牛4頭の販売を含め、総所得は12,725千円（成雌牛1頭当たり131,732円）、所得率42.4%とBSEの影響が残る中で高所得を確保している。
- ⑥ 地域JAの肉用牛組織の役員に選出され肉用牛振興のリーダーとなっているほか、学生や後継予定者の研修を引き受けるなど幅広い分野で地域に貢献している。

（宮崎県審査委員会委員長 森 高 秀 満）

＜発表事例の内容＞

1 地域の概況

宮崎市は、宮崎県の県都として県の中央部に位置し、南北40kmにわたる海岸線を有し、黒潮の影響で冬季も温暖な気候に恵まれる一方で、台風などの厳しい自然条件がある。また、県の広域的な経済・文化の中心としての中核都市であるが、農業も基幹産業の一つとして足腰の強い農業経営の育成に努めている。

農地面積は、総面積の11.4%（3,254ha）にあたる水田がその8割を占めており、水田地帯では早期水稲、施設園芸が盛んである。

平成14年度の農業粗生産額は163億円で、水稲、施設野菜（きゅうり・ピーマン・トマト）、花きが主な作目となっている。また、畜産部門は全体の11.6%で、肉用牛はその約半分を占めている。

畜産農家戸数は、全農家戸数の7.1%にあたる275戸と少ないが、そのうち肉用牛飼養農家は9割となっている。

なお、当経営の所在地である住吉地区は、海岸に位置しており、砂地の畑が多く、施設園芸（きゅうり・ピーマン）が盛んである。地区内の農家数は501戸でハウス園芸を主とする野菜・果樹経営が65%、水稲経営29%、畜産農家は肉用牛のみ6%（31戸）となっている。

住吉地区においても農家の高齢化・後継者不足が進行しており、周辺の都市化の影響もあって農家減少が大きい。こうした中で畜産については、生産性の高い経営の確

立を目指すとともに、混住化が進む周辺状況から環境対策が重要となっている。

2 経営管理技術や特色ある取り組み

本人は、農業専門高校に進み、高校2年生の農家研修の時に研修先の主人から頭と体を使えば儲かるのが肉用牛経営との教えを受け、いずれは肉用牛経営をやりたいとの夢を抱いて、県の農業大学校に入学した。

昭和55年に本人が農業大学校を卒業すると同時に農業後継者として経営に参加することになった。当時の経営は園芸が主体で、繁殖牛は5頭であったが、本人は就農するのを機会に夢を実現するために両親を説得し、制度資金で牛舎の建設と繁殖牛の増頭を図った。

就農と同時に農業青年の組織であるSAP（農業繁栄のための学修）活動に積極的に参加し、県内の先進的な同業者や異業種の人たちとの仲間づくり・交流を通して肉用牛経営に対する意欲と確信は高まり、肉用牛部門の拡大を一層促進させた。また、自らも地区SAP会長となるなど青年運動のリーダー役を果たした。

借入金に頼らない堅実な経営を目指し、自己資金の対応が可能となった昭和62年、63年続けて牛舎増築を行い肉用牛30頭規模に拡大した。

そして、平成元年、結婚と同時に経営移譲を受け名実ともに経営の中心となった。

平成8年、それまで、水稲、ハウス園芸（きゅうり、かぼちゃ）、肉用牛の複合経営であったが、労働力不足が重圧となってきたため、ハウス園芸と肉用牛のいずれを選ぶかを夫婦で真剣に検討し、経営の安定性、規模拡大の可能性から肉用牛専業経営を目指すこととした。同時に20aの水稲も中止し、翌平成9年には県単事業（補助率55%、残額12年間リース）で牛舎と堆肥舎・倉庫を建設し、現在は、自家保留を中心に繁殖牛を100頭規模に拡大している。

1) 自家生産牛を中心にした規模拡大

当経営は、本人が昭和55年県立農業大学を卒業と同時に就農して以来22年の間に、繁殖牛5頭から98頭の規模まで拡大を遂げた。

増頭にあたっては、能力が明らかな自家生産牛を中心とし、そのペースも急激な増頭はやらず、経営の負担能力の範囲で極めて緩やかに、堅実な経営手法で行っている（14年度末の繁殖牛：98頭、うち自家生産牛78頭）。

繁殖牛の更新については、農協から肥育成績の情報を収集しながら、市場評価の高い子牛生産につながるような優良繁殖雌牛群づくりを進めている。

2) 飼養管理技術

(1) 繁殖ステージに応じた牛舎のローテーション

大規模経営においては、繁殖成績の良否が経営を左右する。このため、分娩牛、授乳・種付け牛、妊娠牛の3群に分けて管理し、各牛舎を移動させる。授乳・種付け牛群を収容する牛舎はスタンション牛舎で発情発見が容易である。この牛舎

にはパドックが併設され十分な日光浴とともに乗駕等による発情兆候を見つけやすい。

(2) 繁殖牛の栄養管理

繁殖牛の給与飼料が乾草、稲わらが主体となり、ビタミン不足、虚弱子牛の出生を防止するため、ルーサンペレット、ビタミン剤入りの配合飼料（500g／日・頭）を給与している。

(3) 子牛の集団離乳

離乳は3～4ヵ月齢で行うが、出生日の近い10頭前後を一斉に離乳して、1群として管理する。これによって、子牛の鳴き声が少なくなり、近接住宅への騒音防止に効果があるほか、集団管理による競い合いで飼料の食い込みが良くなる効果もある。

子牛には、良質の粗飼料（チモシー、オーツヘイ）を多給し、十分な腹づくりを心掛けている。

(4) 廃用・更新牛の販売

高齢の廃用牛は、3～6ヵ月の飼いなおしを行い、肉牛として出荷（8頭平均148ヵ月齢）。月齢の若い牛は、評判の高い種雄牛で受胎させ、妊娠牛として販売（3頭平均66ヵ月齢）するなど、有利販売に努力している。

(5) 肥育への取り組み

肥育牛は、常時5頭程度を飼育し、小型で繁殖に不向きな牛、枝肉成績の確認を期待する牛などを仕向けている。

今後は繁殖牛の産肉能力を早期に確認するため、初産子を肥育に仕向けるなど肥育部門の拡大を計画している。

(6) パソコンを利用した肉用牛および経営の管理

数年前にパソコンを購入。普及センターが行う研修に参加して、繁殖牛や子牛をパソコンによって管理している。現在のところ、経営管理までに至っていないが、今後、経営管理や農協等が持っている肥育成績など各種のデータを活用して、生産性の向上や合理化に結びつけたいと考えている。

当経営は、平成4年に畜産会の推薦により優秀経営で県知事賞を受賞しており、平成13年からは畜産会の経営診断を受けている。

3) 効率的な粗飼料生産

大規模経営であるが、自給粗飼料の確保には相当な努力を払っている。周囲に園芸農家が多く、借地条件に恵まれた立地を活かし、成雌牛1頭当たり18aの作付面積を確保している（借地85%）。

作付体系は、冬作は温暖な気候条件に適し、多回刈り可能なイタリアンライグラスを作付け、乾草利用としている（1番刈りは一部青刈り利用）。

夏作は当初、トウモロコシのサイレージ利用を行っていたが、地域は砂地が多く乾燥がちであり、十分な収量を確保することが困難であった。そこで、地域に夏場

に自生し、雑草としてやっかいな存在であったメヒシバに着目した。メヒシバは生育旺盛で高収量が期待でき、牧草タイプで乾燥が早く、加えて牛の嗜好性が高い利点を持っている。栽培はイタリアンの跡地に不耕起で自生したメヒシバに施肥するという単純なもので、種子代不用、手間は施肥、刈り取り、乾草調製のみ、機械類も冬作と共有できるなど極めて低コストの粗飼料である。手間のかからないのが最大の利点と経営主は強調する。倉庫の収容能力を超える粗飼料は、農地内でビニールスタックサイロに貯蔵する（10基・2t／基）。

こうして大規模経営で、TDN自給率42%を達成している。なお、このほかに、周辺から56t（15.5ha、4千円／10a）の稲わらを確保し、自ら乾燥・集草梱包して貯蔵している。稲わらを含めたTDN自給率は52%を達成している。

4) 環境改善の取り組み

当地域は、シーガイア等の観光・リゾート施設に近く、観光客も多いことから環境保全には日常的に気を使っている。

敷料としては、臭気吸着効果の高いオガコ10%、近くのシメジ栽培会社から安価で購入できるオガコを原料とする廃菌床90%を利用している。廃菌床は分解が進んでおり、短期間で完熟堆肥に仕上がっている。

繁殖成績の向上を図るため、牛舎に接し約5aのパドックを設置し、種付期の牛を中心に十分な日光浴をさせるようにしている。パドックからのふん尿等の流出を防ぐため、全面コンクリート張りとしてふん尿の完全回収に努めている。

5) 地域への貢献

平成12年、宮崎市和牛青年部会長となったのをはじめに、JA宮崎中央育種組合副組合長、同繁殖部会監事、宮崎市畜産振興会理事など地域の肉用牛振興を引っ張るリーダーの一人である。

近隣の施設園芸農家の不作付地や高齢者の遊休農地7.5haを引き受けており、地域における土地利用面で大きな役割を担っている。この点、自宅の近辺で、比較的好条件（5千円／10a）での借地が可能となり、肉用牛経営へのメリットも大きい。

平成12年からは、地区のヘルパー組合長に選出されており、セリ市時期には、自らも自家トラックを利用して高齢の農家等の子牛運搬を引き受けている。

また、高校時代に体験した農家滞在研修が肉用牛経営を目指す動機となったことから、若い人とのふれあいを大切にしており、毎年、県内外から学生や後継予定者の研修を受け入れ、生活を共にしながら後継者育成に努めている。

6) 経営実績（平成14年）

成雌牛の平均分娩間隔は12.4ヵ月と、約100頭という大規模経営としては優れた繁殖経営である。子牛販売頭数は68頭（雌31頭、去勢37頭）であるが、平均販売価格は雌396千円（市場対比108%）、去勢422千円（市場対比110%）で、ともに市場

平均より高い。平成14年は1月から5月までBSEの影響が残り、前年比80%程度の子牛相場であったことを考慮すると、極めて高い販売価格と評価でき、長年の優良牛群整備の効果が現れている。

肥育牛4頭の販売を含め、年間総所得は12,725千円（成雌牛1頭当たり131,732円）、所得率42.4%とBSEの影響が残る中で高い所得を確保している。

現在の借入金残高は7,373千円（成雌牛1頭当たり76,328円）と比較的少ない。内訳は、飼料作用の農地購入（3,725千円）、畜舎建設時の基盤整備費（1,683千円）が主なものであり、自家生産牛を中心とした規模拡大や牛舎にリースを活用するなど堅実な経営方針の下で、安定した経営を確立している。

3 経営活動の内容

1) 労働力の構成

(平成14年12月現在)

区 分	続柄	年齢	農業従事日数		年 間 総労働時間	労賃単価	備 考 (作業分担等)
				うち畜産部門			
家 族	本人	42	330	330	1,980	1,000	飼養管理、 飼料生産等
	妻	39	330	330	1,650	1,000	飼養管理、 経理等
	長女	12					
	長男	11					
	次女	8					
	母	72	330	330	1,320	1,000	飼料給与 (分娩、つなぎ)
	計		990	990	4,950		
常 雇	な し						
臨時雇	のべ人日 22 人				170	1,000	堆肥散布
労働力 合 計	3 人		1,012 日	1,012 日	5,120 時間		

2) 収入等の状況

(平成14年1月～平成14年12月)

区 分		種 類 品目名	作付面積 飼養頭数	販売量	販売額・ 収 入 額	収 入 構成比
農 業 生 産 部 門 収 入	畜 産	子牛販売収入	96.6 頭	68 頭	27,876,900 円	78.6%
		肥育牛販売収入		4 頭	2,117,377 円	6.0%
		奨励金等			5,471,398 円	15.4%
加工・販売 部門収入		な し				
農外収入		な し				
合 計					35,465,675 円	100.0%

3) 土地所有と利用状況

単位：a

区 分			実 面 積			備 考
				うち借地	うち畜産利用地面積	
個 別 利 用 地	耕 地	田	20		20	飼料作付
		畑	900	750	900	
		樹園地				
		計	920	750	920	
	耕地以外	牧草地				
		野草地				
		計				
	畜舎・運動場		40		40	うち運動場 5 a
	その他	山 林				
		原 野				
		計				
共同利用地						

4) 家畜の飼養状況

単位：頭

品 種 区 分	成雌牛	子 牛	育成牛	肥育牛	備 考
期 首	93	61	5	4	
期 末	98	63	1	4	
平 均	96.6	62.9	2.8	5	
年間出荷 頭 数		68		4	雌子牛 5 頭保留

5) 施設等の所有・利用状況

種 類		構 造 資 材 形式能力	棟 数 面積数量 台 数	取 得		所 有 区 分	備 考 (利用状況等)
				年	金額 (円)		
畜 舎	牛舎	木造	100 m ²	S54	1,000,000	個人	繁殖牛
	牛舎	木造	100 m ²	S62	1,500,000	〃	繁殖牛
	牛舎	木造	200 m ²	S63	4,500,000	〃	つなぎ牛舎
	牛舎	鉄骨スレート	460 m ²	H9		リース	リース料 1,071,165 円
	牛舎	鉄骨スレート	400 m ²	H9		〃	リース料 849,249 円
施 設	倉庫	木造	110 m ²	H3	2,351,000	個人	
	堆肥舎	ブロック	100 m ²	H9	1,500,000	〃	
	倉庫・堆肥舎	鉄骨スレート		H9		リース	リース料 232,905 円
	敷地舗装	セメント		H8	3,500,000	個人	
	敷地用壁	セメント		H9	1,365,000	〃	
	カーテン柱			H9	525,000	〃	
機 械	トラック	2t ロング	1 台	H2	2,500,000	個人	
	ベラー		1 台	H4	1,300,000	〃	
	マニアスプレッター		1 台	H3	1,000,000	〃	
	モーター		1 台	H8	368,000	〃	
	モーター		1 台	H12	450,000	〃	
	カッター		1 台	H8	373,000	〃	
	ボブローター		1 台	H9	2,450,000	〃	
	ライムソー		1 台	H12	240,000	〃	
	ブロータキャスタ		1 台	H12	250,000	〃	
	フレームハーベスター		1 台	H13	843,000	〃	
	ハーメーカー		1 台	H10	535,500	〃	
	軽トラック	550cc	1 台	H13	1,060,375	〃	
	トラクター	26ps	1 台	H13	1,200,000	〃	
	パソコン		1 台	H14	317,450	〃	
	洗浄動噴		1 台	H12	114,000	〃	
	(ブローア)		1 式	H15	1,428,000	〃	補助率 55%
	(シベルローター)		1 台	HH15	3,705,000	〃	補助率 55%

6) 経営の推移

年 次	作目構成	頭 数	経営および活動の推移
昭和 51 年	水稲 40 a ハウス 80a 〔キュウリ 40 a〕 〔カボチャ 40 a〕	繁殖牛 2 頭	高校 2 年生の時に市内の肉用牛農家で研修を行う。
55 年	〃	繁殖牛 5 頭	県立農業大学校（肉畜学科）を卒業し就農。 育成牛 5 頭導入（後継者資金 300 万借入） 繁殖牛舎（10 頭収容）建設（近代化資金 100 万借入）。
57 年	水稲 20 a ハウス 40a 〔キュウリ 20 a〕 〔カボチャ 20 a〕	繁殖牛 14 頭	ハウスを連棟式に改築（暖房付・面積 20 a）。
62 年	〃	繁殖牛 25 頭	牛舎建設（自己資金 150 万）し肉用牛を増頭する。
63 年	〃	繁殖牛 30 頭	牛舎建設（自己資金 450 万）し肉用牛を増頭する。
平成元年	〃	〃	本人が結婚。経営移譲される。
3 年	〃	繁殖牛 40 頭	マニアスプレッター・コンハーベスター購入。
8 年	〃	繁殖牛 50 頭	労働力不足によりハウス部門を中止し、肉用牛専業となる。トラクター更新。
9 年	肉用牛専業	繁殖牛 60 頭	県単事業「中核的肉用牛経営体創設事業」で牛舎等建設。 繁殖牛舎 （460 m ² ） 980 万 育成牛舎 （400 m ² ） 780 万 堆肥倉庫舎（110 m ² ） 214 万 自家保留で繁殖牛の増頭を図る。 繁殖牛の除角を行う。
10 年	〃	繁殖牛 70 頭	パソコンで母牛個体管理を始める。
12 年	〃	繁殖牛 80 頭	宮崎市和牛青年部会長・ヘルパー組合長に就任。
14 年	〃	繁殖牛 98 頭	現在に至る。

7) 自給飼料の生産と利用状況

(平成14年1月～平成14年12月)

使用 区分	飼料の 作付体系	地目	実面積 (a)	所有 区分	総収量 (t)	10a 当たり 年間収量 (t)	主 な 利用形態 (採草の場合)
採草	夏期：メヒシバ（野草） ＋ 冬期：イタリアンライグラス	田	20	自己	10 12	5 6	1 番草：青草 2 番草：乾草 1 番草：青草 2 番草：乾草
採草	夏期：メヒシバ（野草） ＋ 冬期：イタリアンライグラス	畑	900 〔自己 150 借地 750〕	〔自己 ＋ 借地〕	450 480	5 6	1 番草：乾草 (一部青草) 2 番草：乾草 1 番草：乾草 (一部青草) 2 番草：乾草
計			920		1,904		

8) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（肥育を含む）

期 間		平成 14 年 1 月～平成 14 年 12 月	経営実績
経営の概要	労働力員数 (畜 産)	家 族	2.25 人
		雇 用	0.1 人
	成雌牛平均飼養頭数		96.6 頭
	飼料生産用地面積		1,840 a
	年間子牛販売・保留頭数		73 頭
収益性	繁殖部門年間総所得		12,725,311 円
	成雌牛 1 頭当たり年間所得		131,732 円
	所 得 率		42.4 %
	成雌牛 1 頭当たり	部門収入	310,810 円
		うち販売収入	288,581 円
		売上原価	246,239 円
		うちもと畜費	23,236 円
		うち購入飼料費	92,410 円
		うち労 働 費	53,313 円
		うち減価償却費	31,233 円
生産性	繁殖	成雌牛 1 頭当たり年間子牛販売・保留頭数	0.76 頭
		平均分娩間隔	12.4 カ月
		受胎に要した種付回数	1.31 回
		雌子牛 1 頭当たり販売・保留価格	382,358 円
		雌子牛販売・保留時日齢	323 日
		雌子牛販売・保留時体重	268 k g
		雌子牛日齢体重	0.831 k g
		去勢子牛 1 頭当たり販売・保留価格	421,845 円
		去勢子牛販売・保留時日齢	283 日
		去勢子牛販売・保留時体重	269 k g
		去勢子牛日齢体重	0.951 k g
	粗飼料	成雌牛 1 頭当たり飼料生産用地面積	19.0 a
		借入地依存率	85.4 %
		飼料 T D N 自給率	42 %
	成雌牛 1 頭当たり投下労働時間		53 時間
安全性	総借入金残高 (期末時)		737 万円
	成雌牛 1 頭当たり借入金残高 (期末時)		76,328 円
	成雌牛 1 頭当たり年間借入金償還負担額		29,197 円

※飼料生産用地面積は、作付実面積に作付回数（夏作、冬作）を乗じた面積である。

(2) 技術等の概要

①繁殖部門

経営類型	繁殖・肥育混合経営（繁殖主体）
飼養品種	黒毛和種
放牧の有無	なし
自家配合の実施	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器具等共同利用の実施	なし
生産部門以外の取り組み	なし
E T活用の有無	なし
繁殖牛へのサイレージ給与	一部期間

②肥育部門

主な飼養品種	黒毛和種
飼養方式	ストール
自家配合の実施	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器具等共同利用の実施	なし
生産部門以外の取り組み	なし
肥育の目標	肉質重視
預託肥育牛の割合	0%

4 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

1) 家畜排せつ物の処理方法

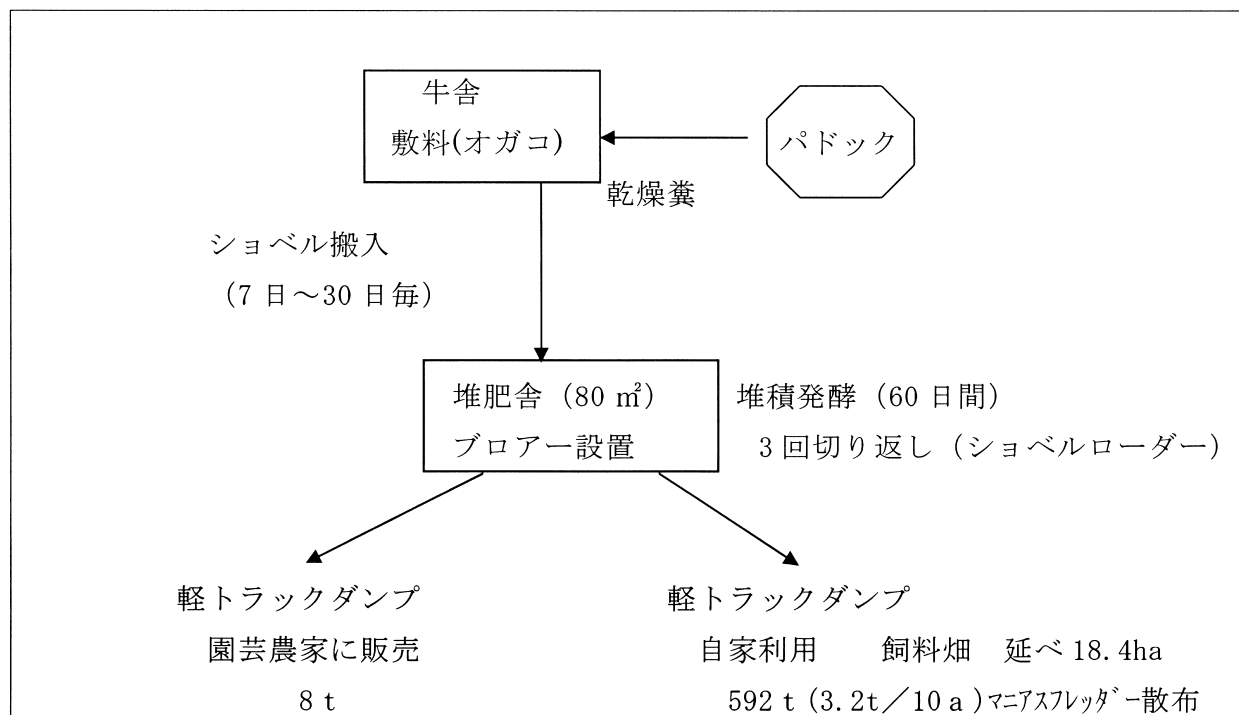
- ・ ボロ出しは、繁殖関連牛舎は1週間毎、また子牛育成舎は15～30日毎にショベルで堆肥舎に搬出している。その後、敷料にオガコを利用している。
また、パドックは、ふんの乾燥を確認しながら定期的に戻し堆肥として利用している。
- ・ 敷料には、オガコのほか、シメジ生産廃菌床を廃物利用している。
(敷料の購入量と金額)
シメジ生産廃菌床 200₁^a 100,000円
オガコ 10₁^a 20,000円
カンナ屑 7₁^a@@ 無償
- ・ 牛房には、直下型扇風機を設置して牛舎の換気を行うとともに、敷料の日持ちを長くさせている。
- ・ 堆肥舎に搬入するふんの水分調整として、パドックの戻し堆肥を利用している。

- ・ 堆肥舎（80₁）は、発酵促進のためブローアを設置し、3槽に区分している。
1槽に20日間発酵させた後、切り返しを兼ねて次の槽にショベルで移動させ、60日間発酵させる。
- ・ 完熟堆肥になったものを軽トラックで圃場にもっていき、マニアスプレッターで散布の後、ロータリーで耕耘し鎮圧する。
なお、忙しい時には、堆肥運搬等をオペレーターに依頼している。
- ・ 堆肥は一部を園芸農家に販売する以外はほとんどを自家利用している。

2) 家畜排せつ物の利活用

内 容	割合（％）	品質等（堆肥化に要する期間等）
販 売	1	品質が良いとの評価を受けている。堆積発酵約 2 ヶ月
交 換		
無償譲渡		
自家利用	99	堆積発酵約 2 ヶ月

3) 処理・利用のフロー図



4) 処理・利活用に関する評価と課題

(1) 宮崎県審査委員会の評価

- ・ 敷料にシメジオガコ廃菌床を利用しているので、敷料費の経費節減につながっているとともに、シメジオガコ菌により発酵が促進されているため60日と短い期間に完熟堆肥になっている。

当経営は混住地域にあることから害虫発生防止や悪臭対策のために堆肥発酵槽にブロアーを設置して完熟堆肥生産に努めている。

- ・ パドック（全面コンクリート張5a）のふんは乾燥した時にショベルで集ふんし、牛舎に投入し水分調整として利用している。
- ・ 生産される堆肥は、飼料作付け時期をずらしながら堆肥散布しており、ほぼ100%自家利用している。
- ・ 堆肥を少し園芸農家に販売し、品質は良いとの評価を得ており、他の園芸農家からも要望があるが、散布する労働力がなく断っている現状がある。

(2) 課題

堆積発酵施設で処理された堆肥は、圃場に散布し耕耘しているが、梅雨や今年のように長雨時に、一定量の貯留施設を設置する必要がある。

5) 畜舎周辺環境美化に関する取り組み

近くに住宅が隣接しているので、牛舎のボロだしや清掃には気をつけている。また、畜舎周辺に垣根（一葉）を設けたり、花木（紫陽花）を植栽し環境美化を行っている。

5 後継者確保・人材育成等と経営の継続性に関する取り組み

- ・ 経営主は、まだ42歳と若い。
- ・ 休日の午前中には、長女（中1）を頭に3人の子供がよく手伝いをする。

6 地域農業や地域社会との強調・融和についての活動内容

- ・ これまで、SAP活動（農業繁栄のための学修）に積極的に参加し、住吉地区会長として活動発表や自主的学修活動と仲間づくり・交流を通して肉用牛経営確立の参考としてきた。
- ・ 平成12年に地域組織の役員就任を皮切りに現在では、JA宮崎中央繁殖部会監事、同育種組合副組合長、宮崎市畜産振興連合会理事等の役員に就任し地域の肉用牛振興のリーダーでもある。
- ・ この地域は集約型の園芸農家が多く、不作地や高齢農家所有地など遊休農地が多い。その中で数少ない土地利用型経営として粗飼料生産用に7.5haの借地を行い、地域の土地利用率向上に大きな役割を果たしている。

現在、園芸は中止しているものの、部会組織からは脱退せず、年1回の研修旅行に参加するなど仲間づきあいを大切にしている。

- ・ 毎年、県農大生や県内外の新規就農希望者を1～6ヵ月の間、研修生として受け入れている。また、これまで国や県の職員研修も受け入れしている。
- ・ 地域のまつりや懇親会では、宮崎牛の美味しさのPRと消費拡大のために率先して焼肉パーティーを提案し実施している。

長男はラグビークラブに入会しているが、本人はクラブチームの指導者として、忙しい飼養管理の時間を割き土・日曜日にコーチとして参加している。

7 今後の目指す方向性と課題

＜経営者自身の考える方向性と課題＞

(1) 繁殖雌牛群の資質向上と系統整備

母牛群の整備にあたっては、産子の産肉性の向上を図るため、子牛の市場評価が高い安平・福桜系に集約し、体の大きい母牛に更新していく（現在は安平系30%・福桜系30%・安平系×福桜系10%・その他30%）。

(2) 繁殖管理の改善

徹底した個体管理と発情発見のため、朝夕の観察のほかに真夜中に繁殖牛の見回りをするなどしており、ほぼ年1産を達成している。

今後は、さらなるワクチネーションと衛生管理の実施により死産・流産（4頭）と子牛事故（2頭）を0に近づけたい。

(3) キャトルステーションを活用し増頭を図る。

農協が建設したキャトルステーション（繁殖農家が離乳から子牛出荷まで有料で預託）は建設地区の国富地区が対象であるが、対象地区が拡大すれば契約したいと考えている。それにより牛舎に余裕ができるので繁殖牛の増頭を図りたい。

(4) 肥育部門の拡大

肥育牛は、小型で繁殖に不向きな牛、枝肉成績の確認を期待する牛など常時5頭程度を飼育しているが、今後は繁殖牛の産肉能力を早期に確認するため、初産子を肥育に仕向けるなど肥育部門を30頭程度に拡大したい。

(5) 粗飼料の乾草利用からロールへの転換

作付体系は現状のままで、乾草調製を主体としているが、稲わらの乾燥調製は労力のピークになっており、天候にあまり左右されないロール利用にしたい（ロールベラー・ラッピング購入）。

(6) パソコンを活用した経営管理

数年前からパソコンを活用し、繁殖牛、子牛の生産管理を行っているが、さらに技術を修得して経営の管理まで行い、効率の高い経営を確立したい。

＜審査委員会の評価＞

- ① 経営主は、就農以来、極めて堅実な経営方針を貫き、22年という長い期間をかけて、借入金に頼らず、能力の判明した自家生産牛を中心に着実な規模拡大を続け、100頭規模の大型繁殖専門経営を築き上げた。
- ② 大型経営にありがちな「量で勝負」といった方針をとらず、平均分娩間隔12.4ヵ

月と県平均を大幅に上回るなど生産技術のレベルが高い。また、優良繁殖牛群の整備に力を入れた結果、子牛販売価格は地域の家畜市場平均比109%と、市場評価の高い優秀な子牛を出荷している。

- ③ 地域が施設園芸地帯であり、土地利用型農業が少なく農地にゆとりがあること、都市近郊とはいっても高齢農家が多く、遊休農地が多く発生していることから、有利な条件で借地を確保し、粗飼料の自給体制を確立している。この結果、規模が大きく、一部肥育もとり入れた経営でありながら、TDN自給率42%、周辺から調達する稲わらを入れると51.5%という高い自給率を達成している。

また、地域が海岸に近く、砂質土壌で適する夏型粗飼料がないことから、自生するメヒシバを利用した良質・低コストの粗飼料の確保を図っている。

- ④ 地域内にはシーガイアなど大型観光・リゾート施設が多く、環境整備には相当の配慮が必要とされるが、ノコクズと近辺で入手できる廃菌床を敷料として用い、臭気の発生を抑えるとともに、短期間での完熟堆肥化が図られている。
- ⑤ 平成14年度の経営実績は、肥育牛4頭の販売を含め、総所得は12,725千円（成雌牛1頭当たり131,732円）、所得率42.4%とBSEの影響が残る中で高所得を確保している。
- ⑥ 地域JAの肉用牛組織の役員に選出され、肉用牛振興のリーダーとなっているほか、学生や後継予定者の研修を引き受けるなど、幅広い分野で地域に貢献している。